

## 【一】解答

- 問一 神のように畏敬される「存在。」
- 問二 北アメリカの先住民は、オオカミに敬意を払いつつ共存してきたのに、悪魔として憎悪する、西洋からの移住者によって撲滅が図られたこと。
- 問三 オオカミを撲滅した結果、大型のシカが増えて生態系が病んだため、オオカミを復帰させた点。
- 問四 オオカミが肉食獣であることは、進化の中で獲得した性質であり、草食獣を食べることで生態系を守る役割も果たしているというもの。

## 【二】

- 問一 「ぼく」の心の中で、父さんは今も生きていると感じて、慕う思い。
- 問二 「父さんがいまも生きていてくれればいいのにな」と気軽に言ってしまう、大した思い入れがないように母さんに思われたかもという気がかり。
- 問三 今も父さんを思いつづけている母さんに、最期のことを聞いて、悲しませたくないから。
- 問四 亡父を慕い、大切に思っている「ぼく」の心を尊重してくれたから。
- 問五 ドイツ語なまりの転校生として注目を浴び、笑われることがなくなり、自然に自分らしくふるまえるようになったということ。

## 【三】

1 軍配	2 未熟	3 留守	4 保証	5 連帯
6 快適	7 配属	8 勤勉	9 著作	10 招待
11 窓	12 乗〔る〕	13 焼〔く〕	14 暑〔い〕	15 険〔しい〕

## 解説

## 【一】 出典は高槻成紀／南正人「野生動物への2つの視点」

栄光の論説文の特徴は、次の三点です。

- ① 段落構成がしつかりしており、しばしば段落を適切に分けさせる問いも出題される。
- ② 筆者の主張がはっきりしており、記述問題で、含めるべきキーワードが見つけやすい。
- ③ 問いのほとんどが記述問題であり、字数制限はない。が、本文中の利用すべき部分に比して、解答欄が狭いので、だらだらと書けない。キーワードを含めつつ、要領よく簡潔にまとめる工夫が必要だ。

本年の入試もこうした例年通りの特徴をもった文章・設問が出されています。ただし、書き抜き・選択式が一つもなく、四問とも記述式になっていること、また、文章がやや多めであることが、例年と異なる点です。

まず、段落分けをしてみます。

- 1 （話題）動物に対する考え方は、自分の有った社会の影響を受けるものだ。
  - 2 （2行め）オオカミのイメージ。ヨーロッパでは、「ずるくて悪く、恐ろしい動物」。
  - 3 （13行め）オオカミのイメージ。近代化以前の日本では、農業被害を出すシカやイノシシを退治してくれる救世主であり、かつ畏怖の対象でもあった。
  - 4 （30行め）なぜ同じオオカミに対して、日本では神のように畏敬され、一方、ヨーロッパでは悪魔のように嫌悪されたのか？ ↓ 日本の稲作では、シカやイノシシが敵であり、その敵を退治してくれるオオカミは味方である。一方、ヨーロッパの畜産では、ヒツジを襲うオオカミは悪魔であった。ただし、北米の先住民およびアイヌでは、狩猟の好敵手として、オオカミは尊敬されていた。
  - 5 （47行め）オオカミを撲滅したイエローストーン国立公園では、シカが増えすぎて植生が破壊された。↓ シカの頭数を抑制してくれるオオカミを復帰させた。（Ⅱ歴史の「皮肉な経緯」）
  - 6 （55行め）「オオカミの捕食がシカという生態系に強い影響をおよぼす草食獣の密度が高くなりすぎないように抑制しているという役割」をもっていることを、動物生態学は明らかにした。
  - 7 （64行め）（まとめ）オオカミとの関係から言えること。↓ 科学的な知識は、一般人の偏見を小さくするのに有効であり、「その動物が果たす生態学的役割を示すことで、その動物のもつ価値や意義を伝えることができる」。
- 問一 「近代化以前の日本人」のオオカミ観については、第3段落で説明されています。「自分たちの苦しみを和らげてくれる天の助け」と映ったり、「超能力者」に見えたり、「畏怖となり、さらには畏敬にも」なったりしたのです。

こうしたキーワードを使ってまとめてもよいのですが、次の第4段落のはじめの方で「日本では神のように畏敬されていた」と要約してくれているので、そこに着目します。

問二 第4段落に注目します。①北米の先住民は、オオカミに対して、草食獣を狩猟するハンターとして好敵手として尊敬の念を持っていた。②しかし、西洋からの移住者の間では、オオカミを悪魔とみなすヨーロッパの価値観がそのまま持ち込まれた。③その結果、移住者が先住民を力でねじ伏せ、オオカミは「敵」とされ、徹底的に撲滅が図られた。……以上の三点を、うまく四十〇五十字程度にまとめます。両者のオオカミ観を説明しつつ、一方の考えが他方の考えによって、ねじ伏せられた、駆逐された点をまとめます。

問三 第5段落に注目します。①北米の移住者は、オオカミを憎み、駆除し、撲滅を果たした。②その結果、オオカミが頭数を抑制してきた大型のシカが増えて、森林が破壊され、生態系全体が病んでしまった。③生態学者が、オオカミ復帰の必要性を認識し、社会のオオカミ嫌悪をなくす教育を広め、ついにオオカミ復帰を実現させた。……以上の三点を、うまく三十〇四十十字程度にまとめます。オオカミの撲滅↓シカの激増↑生態系の破壊↓オオカミの復帰、という内容を要領よく書きます。

問四 第6段落に注目します。動物学者ないし動物生態学者が明らかにした「オオカミの正しい実像」は、「また」(59行め)の前と後との二点があります。前の方は、「オオカミは肉食獣」だが、それは「その動物が進化の中で獲得した性質」そのものである点です。また、後の方は、「オオカミの捕食が、シカという生態系に強い影響をおよぼす草食獣の密度が高くなりすぎないように抑制しているという役割」を持っている点です。この二点を、四十〇五十字程度でまとめます。

【二】 出典はサイモン・フレンチ作 野の水生記「そして、ぼくの旅はつづく」。

栄光の物語文の特徴は、次の三点です。

① 小学校高学年くらいの子を主人公とした読みやすい文章であり、外国のものがしばしば出される。

② 周囲の人々とのかわりの中での、人物の気持ちや心の動きの読み取りが問われる。

③ 設問文の指示が最小限で、解答欄も小さなもので、ポイントを押さえた要領のいい記述が求められる。本年の出題も、この特徴をもったものです。三年前に、母親の再婚によってドイツからオーストラリアに引っ越してきた十一歳の少年。彼は、亡き父を今も慕っています。優しい母親、少年の気持ちを大切にしてくれる新しい父、いろいろかまってくるクラスメートたち、自宅で営むカフェの気のいいお客たち、こうした人々とのやりとりからうかがわれる少年の気持ちを読み取ります。

問一 「住んでいる」という表現からは、父さんは死んでしまったけれど、まだ生きているんだという少年の気持ちを読み取れます。どこに？ 彼の心の中に、です。この「心の中で生きている」という点と、そんな父に対する「気持ちを表すことば」、たとえば「慕う・なつかしがる・大切に思う」などを含めます。

問二 「いままも生きてくればいいのにな」という自分の答え方が、なんだか「きょうも晴れないのにな」といった、大した思い入れもない気軽な口調だったように感じました。それは、「毎日、父さんのことを思っているわ」と言う母さんの耳には、死んだ父さんのことなんか「どうでもいいみたい」に聞こえたんじゃないか」と不安になったのです。この問いでは、「不安」の内容を聞いているので、「気持ちを表すことば」は含めなくてもかまいません。

問三 五歳になる前の幼い「ぼく」は、父さんはどうして帰ってこないの？と、母さんに何度も尋ねました。そのたびに母さんは、夫と実父の死亡した事故の日のことを話しました。その話を理解できたあとは、少年はもうけっして母さんに尋ねなくなります。なぜなら、母さんは、今もなお「ほんとうに、父さんのことを思いっづけている」のであり、父さんの最期のことを尋ねること、思い出させることは、母さんの深い悲しみを再びよみがえらせることだと、少年はわかっているからです。

問四 「そんなふうに」が指している会話に注目します。新しい父親ジェイミーは、少年にこう言ってくれました。「ぼくは、きみの父さんに取って代わろうとは思ってない。ぼくはぼくだ。きみが、いつでもなんでも話せる相手、と思ってほしい」と。つまり、ジェイミーは、少年の心には今も亡き父親が生きており、深く慕っているのを知ったうえで、その心を尊重しようと考えている。そして、その考えをはっきりと少年に伝えようとしたのです。また、少年もジェイミーの意思を理解して、嬉しく感じているのです。もしかしたら、ジェイミーは、「アザミの模様の額に入った(亡き父の)写真」を少年が大切に大切にしているのを知っているのかもしれないね。

問五 ドイツからオーストラリアに転校してきたばかりの頃、少年のドイツなまりの英語は「ぼくはなにか言うたびに、ほかの子たちに笑われた」のです。珍しがられ、からかわれたのです。彼はぜひぶんと居心地の悪い思いをしたことでしょう。しかし、そのうちにまた何人かの転校生が入ったために、クラスメートたちの興味の対象がそちらに移り、やっと少年は注目とからかいから解放されたのです。そうして、周囲に対して身構えることなく、あたりまえの「ぼく」でいられるようになった、つまり、ふつうの生徒のひとりとして、「ぼく」らしく自然にふるまえるようになった、ということですね。